

芥川龍之介『偷盜』の非道の物語

三 苦 浩 輔

一 『偷盜』の素材

芥川龍之介は「中央公論」大正六年四月・七月号に発表した『偷盜』を、大正六年三月二十九日付松岡譲宛の手紙に「僕の書いたもんぢや一番悪いよ」⁽¹⁾と自嘲しているように彼自身評価せず、生前、単行本に入れなかった。不注意なミスが散見され、また『今昔物語集』よりも今昔風で、無声映画時代の活劇、あるいは今日の安手の劇画をみる感じがなくもない。だが、そのことと別に、私はこのところ関心を寄せている「国つ罪」の問題にからめて、女盜賊沙金をめぐる男関係に興味を覚えている。

『偷盜』は『今昔物語集』巻第二十九の「不被知人女盜人語第三」に材料を得ている。女盜賊が通りがかりの男を「半部ノ有ケルヨリ鼠鳴ヲシテ手ヲ指出テ招ケレバ」という書き出し部分と、「(女

は)あの半部の間から、雀色時の往来を覗いてゐる。さうして己の姿が見えると、鼠鳴きをして、はいれと云ふ」(一四四)とを並べてみれば両者の関係は一目瞭然である。男が女の情夫になるのも、両者同一である。しかし『今昔物語集』では、鼠鳴きに呼び込まれた時が初めての出会いなのに対し、『偷盜』ではそれ以前があった。男が右の獄^{ひとや}の放免(検非違使庁の下仕え)をしていたとき、入獄して来た女と、ふとした事から牢格子を隔てて話し合うようになり、やがては互いの身の上を打ち明けるまでになって、ついには猪熊のお婆や盜賊仲間らによる牢破りを見逃してやった。その後、男は猪熊のお婆の家に出入りするようになり、男がやってくるとうのは鼠鳴きをして男を呼び寄せ、情を交わすようになっていったというのが芥川の脚色である。

だから『偷盜』が巻二十九の第三に材を得ていると言っても、一

から十までそれに依っているわけではない。むしろ借用したのは女盗賊とその情夫というかたちだけで、あとは自在に筆をふるっていると言つてよい。また借材は巻二十九の三だけではなく、一味の多襄丸の名は同巻の二、「猪熊」の爺婆と押し込み先の「藤判官」は同巻の七の「猪熊の綾の小路」「藤大夫」、盗聴は同巻の「筑後前司源忠理家入盗人語第十二」から出ている。男が盗み出す陸奥産の馬の話は巻第二十五「源頼信朝臣男頼義射殺馬盗人語第十二」、小屋に放置された瀕死の疫病女を襲う野犬の群の話は巻第二十六「東小女与狗咋合互死語第二十」に依つていて、『今昔物語集』のあちこちから小間物を仕入れているのが知られるのである。だがそれらは話の盗賊物語の枝葉に過ぎない。

メリメの『カルメン』に多く依っていることも夙に指摘されている。^① 女盗賊沙金にカルメン、放免の太郎にはドン・ホセと隻眼のガルシアが投影されている等々であるが、それでも沙金をめぐる偷盗どもの物語は、作者には不満の作であっても、芥川龍之介の創作である。

二 妻の連れ子と通ずる男

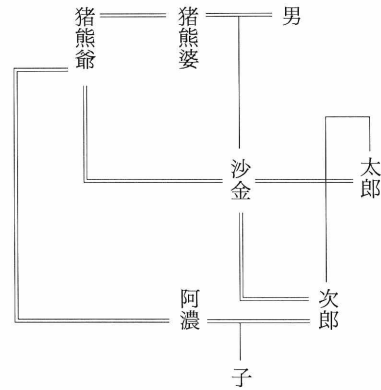
猪熊のお婆は若いころ、宮中は清涼殿の台所の婢女みずしをしていて、そこで「思ひがけない身分ちがひの男に、挑まれて」（一三九）生

まれた娘が沙金である。身分違いと言うけれど、男はどれほどの身分だったのか。台所で下働きをする女には五、六位の男でも身分違いと言えようが、身分のほどは語られていない。ただ、婆自身が「鳶が鷹を生んだ」（一三六）と言っているのからすれば、生まれたときから女の子は身分のある男の血をうけて、母親に似ぬ可愛い子であつたと読み取つてよいであろう。

子供を生んだ婢女が忽然と姿を消したのを知った左兵衛府の下人が、「俄に、この世が味気なくなつてしまつた」（一五七）のは、心を寄せていたからだ。情人の子を孕んだのが衝撃だったのではない、行く方知れずになつたことが気持ちを萎えさせた。めおとなつてくれるならわが子同然に育てようと、下人の婢女への思いはそれほどに深かつたのである。

以来、下人は酒におぼれ賭博を打ち、遂には誘われて強盗に身を落とした。それでも綾を盗れば綾につけ、錦を盗れば錦につけて婢女を思い、時の間も忘れることなく十年十五年がたち、巡り会つて夫婦になつた。

その間婢女が何で暮らしをたてていたのかわからない。盗賊の男と夫婦になつたとき、女もその一味になつていくのは自然の成り行きである。そして、男は妻の連れ子沙金と関係を結んだ。京の猪熊のひとつ家に住み暮らす爺と婆と、その娘沙金の三角関係である。



今、沙金は二十五、六歳の女さかりで、一味の頭領である。「小柄な、手足の動かし方に猫のやうな敏捷さがある」（一五二）のは、天性にくわえて長年の盗賊稼業がみがきをかけたものである。中肉で、「顔は、恐しい野性と異常な美しさが、一つになつたとも云ふ」ほかはない容貌であつた。人殺しをいとわぬ盗賊を束ねていくには、「恐しい野性」は不可欠の資質であらう。こまかく顔の造作を見ていけば「狭い額とゆたかな頬と、鮮な齒と淫な脣と、鋭い眼と鷹揚な眉と、——すべて、一つになり得さうもないものが、不思議にも一つになつて、しかもそこに、爪ばかりの無理もない」（一五二）のだから、酷薄と熱情が併存し、その気になれば手もなく男を擲めとる美貌と言うべきかも知れぬ。

婢女の母子が姿を消して十五年目に再会したとすれば、その時、沙金は十五、六歳くらいであつたか。美貌は開花のときをむかえて、匂いたつやうであつたらう。長年恋してやまなかつた女に会えた喜びもさることながら、男が妻の連れ子に目をうばわれ手を出したのも、雄おすというものの自然な振舞であつた。

沙金はいま二十五、六歳だから、それから十年の月日がたつてゐる。

女は、夫と娘の關係をはじめて知つたとき「まるで、気がふれたよう」になり（一三七）、「泣いて騒い」だ（一三九）。男をほかの女にとられる悔しさは言うまでもない、まして同居する娘にとられるのだから、無念、腹立たしきは言ひようもなく、よくもまあ、本当に狂わなかつたものである。だが、女には、母と娘が一人の男に通ずるといふ、古代より日本人が深く畏れ慎んできた「国つ罪」への思いはなかつた。ただ女としての怨念があるだけである。その間に、黒髪に霜が降り、顔は皺におおわれて腰は曲がり、蛙股の杖をつくお婆になリかわつて、家業の盗み人殺し同様に、夫と娘のことも「当り前の事としか思はれない」（一三九）ようになっていた。

沙金二十五、六歳、お婆は「六十ばかり」（一三六）である。二十五と六十として単純計算すると、婢女は三十五歳で沙金を出産したことになる。すると身分がいの男が手を出したとき、婢女は三

十四歳である。『梁塵秘抄』巻第二の三九四に、

女の盛りなるは、十四五六歳廿三四とか。三十四五にしなりぬれば、紅葉の下葉に異ならず。

とうたわれているように、三十四、五の女はもはや「紅葉の下葉」で、女としてのかがやきは失われている。台所の婢女でも十五、六のびちびち娘ならば食指も動こうが、臺の立つたはした女に挑みかかるであろうか。

そのとき、婢女は小娘だったのではないか。本文にも「自分が若かつた昔」(一三八)のこととあり、一層その感を強くするのだが、作者は深い計算もなく、男に挑まれたときは若い盛りの十五、六で、老婆として出すときにはいかにも年を食った老女に仕立てて六十とし、沙金を登場させるときには沙金を女盛りの二十五、六とした。その結果六十と二十五の母娘、すなわち三十五歳の出産となつて、なにやら帳尻が合わない印象である。

婢女が年をとったように、男も年をとつて満足に男の機能を果たせなくなつて来ているよう。女盛りの沙金には新しい男があてがわれなければならないまい。それが鼠鳴きにまねき入れられる男、右獄の放免の太郎である。疱瘡のあとをとどめる隻眼のあばた面の醜男だから、いい男に惚れたというよりは、破獄をみのがしてもらつたお返しのためでもあつたか。それとも太郎の心根のうちに、余人にな

いものを感じ取つたか。太郎は醜い己が沙金をとらえているとすれば「それは己の魂の力に相違ない」(一四七)と思つている。太郎は沙金の脱獄をみのがしてやつて、猪熊のお婆の家に出入りをするようになった。

陽が落ちて訪れ、夜が明けて帰ることを一月もくり返しているうちに家の様子が知れてくる。沙金は猪熊のお婆の連れ子、日頃は体をひさぎ、傀儡同様の暮らしをしつつ裏では二十数人の盗人の頭で時に京を騒がせている、などなど。訪ねるたびに沙金から仲間に入るよう誘われた。断ると、憶病だと言つて莫迦にされた。それでも断り続けたのは、三宝を敬い、王法に遵うことを怠らなかつた(一四四)からであらうし、かと言つて猪熊の家の出入りをやめなかつたのは、沙金の魅力に搦めとられていたからであらう。

沙金の暮らしぶりを思えば、沙金の男はおれ一人ではないことは容易に察しがつく。沙金自身が、関わりのあつた男を誰それ彼それと自慢らしく太郎に言うことさえあつた。「あの女の心は、己だけが占有してゐる。さうだ、女の操は、体にはない」(一四五)とおのれに都合のよい理屈をこしらえ、そう自分を信じこませることで「嫉妬を抑へてゐた」。魔性の女だ、どれほどの男が肌をあわせているか知れたものではないと承知しながら諦めきれないならば、そんな風にでも自分で自分を言いくるめるしかあるまい。

沙金の立場からすれば、太郎はその他大勢の男の一人に過ぎず、沙金を占有するとは身の程知らずの譎である。嫉妬など、以てのほかである。それが分かるから、太郎は嫉妬せず、操を心に求めている自身をなだめてきた。

だがある時、沙金と養父との関係に気づいた。他の男との関係は見のせても、これだけは許せない。不快で、「さう云ふ事をする親子なら、殺しても飽きたらない」、それを黙って見ている実の母の猪熊の婆も「畜生より、無残な奴だ」（一四五）と思われた。実際、酒太りした猪熊の爺を見るたびに刀の柄に手をかけること一再ならずであった。その都度、沙金がことさらに養父を莫迦にするので、その手管が見え透いていながら、太郎は心を鈍らせた。

太郎の猪熊の爺に対する怒りは、自分の情婦と通じていることに発したものではない。それを言うなら、爺の方が先だから、お前こそ何だということになる。

一人の男が母とその娘に通ずることの非道を、その是非を脳裏に云々して悟るのではなく、直截的に感じているのだ。そこには古代から持ち伝えてきた日本人の規範があり、それがみだされたことに對する怒りが、体の芯から噴き上げてくるのだ。盜賊の女頭領と情を交わす仲になりながら一味に加わらない程の理非の判断がある太郎である、爺も沙金も婆も許せない、刀にかけてもという怒りに

は、けがされた神の怒りにも似たものが感じられる。しかし、猪熊の爺を憎みながら、どうしても沙金を憎む気になれなかったところに、沙金の魔性の魅力もさることながら、太郎の限界があった。

三 太郎の苦悶

その頃、突然、筑後の前司の小舎人になっていた弟の次郎が盜人の嫌疑をかけられ、左の獄に入れられた。獄中の苦しみを知る放免の太郎は、まだ筋骨のかたまらない弟の身の上をわが事のように案じて沙金に相談すると、「牢を破ればいゝぢやないの」（一四六）と事もなげにこたえた。沙金と、五六人の盜人を語り集めて獄を騒がせて弟を救い出した。その際、太郎は放免の一人を斬り殺した。彼には初めての人斬りであり、自身も斬られてその刀創のあとが残った。以来、兄弟は猪熊の沙金の家に人目を忍ぶ身となり、盜賊の仲間を身にかけて一年のあいだに火付け人殺しと、あらゆる悪事をかさねてきた。

次郎は十七、八歳。兄弟ともに患った疱瘡は太郎の片目をつぶし、あばた面にしたが、次郎は軽くてすんで「生まれついた眉目をその儘に、うつくしい男になつた」（一四七）。古畳よりも新しい畳を望むのはなにも男だけとは限らない。女にしても、体の隅々まで舐め回しあつた男よりも、若くて新しい男が現れればそちらに乗り

換えたくなるのは理の当然である。それも醜男から美男へだから、乗り換えない方がおかしいくらいだ。自分の魅力を十二分に承知している女には、十七、八の男をたらしこむのは造作もないことだ。それが分かるだけに太郎の不安と苦しみは深い。

悪事を重ねるにつれて、太郎が沙金への愛着を深めていったのは理解できる。一仕事おえて帰ってきて、極度に緊張した神経がゆるんでゆくその時に求めるものは、酒もあろうが女にまさるものはあるまい。柔らかな体にとがった神経はしずめられていくはずである。或いはひと月三十日が三十日稼ぎに精を出すわけでもあるまい、十日も稼げば上々であろうし、では、明るい日の下を歩けぬ身で、あとの二十日は何をして過ごすかといえど女しかないではないか。まして女は、男おんなの技を知りつくした、今をさかりの美女である。太郎が沙金の性の深淵にとりこまれていくのはきわめて自然であった。男の二十歳、精力にあふれ、女のからだがかつてくる時分であり、稼ぎの最中でも沙金のからだが目先にちらつくこともなくはなかったであろう。

今は何をするのも沙金故である。盗み火付け、人を殺すのも沙金故である。沙金に憶病者とわらわれないためには何でもした。次郎を助けたのも、弟の身を案ずる以上に、獄を破って弟を助け出す勇氣もないのかと沙金に嗤われることをおそれたからであった。女の

経験が豊富であれば、あの程度の女は世間にざらにいると思う余裕も生じようが、なにせ世の中の経験が不十分な、二十歳の男である、思いは一途で、「何に換へても、あの女を失ひたくない」(一四七)と思ひ詰めていく。

沙金が一人の男で満足する女でないことは承知している。沙金にとって男は恋云々の問題ではない、時により場合により誰とでも寝転ぶ。自分には養父、母には夫である男にさえ身を任せる女なのだ、この女ゆえに身を亡ぼした男など数えきれまい。だから太郎は沙金の体を「占有」できないと自分を納得させていた。

しかし次郎は別だ(一四七)。次郎に沙金を奪われるのは耐えられなかった。「目鼻立ちの整った」(一四三)弟に乗り換えられるのは、隻眼のあばた面の醜男なる己自身にあらためて直面させられるという屈辱感もあるが、それ以上に、弟に裏切られたという無念がある。沙金のことだから弟を誘惑するのは知れている、だが子供のときからおれを慕ってくれた弟が兄の気持ちを思いやって誘いにのらない、そういう「慎しみ」(一四三)に期待をかけていたのである。だがそれは買いかぶりに過ぎず、弟への信頼が失せていくのが太郎に耐えられなかった。

次郎にしても兄が寝ている女だと承知しているはずだから、自分から言い寄っていくことはあるまいし、女から誘惑されても一旦は

拒む。だが沙金の巧妙な色仕掛に抗し切れずに、日ならずして籠絡されてしまふであろう。沙金の性^{さが}を熟知しているだけに、実際に弟をたらしこんでいく沙金の媚態が思い描かれていつそう太郎を滅入らせる。

おのれの容貌に自信のある者は、男おんなを問わず、みずから積極的に異性をもとめていく。自分の醜貌を恥じて情事に控えめであつた太郎も、沙金にだけは「氣違ひのやうに、恋をした」（一四七）が、それだけに美男美女の次郎と沙金が近づくのは「無理もない」（一四七）と思われる。だが「無理がない丈」に太郎には苦痛であつた。「己の二十年の生涯は、沙金のあの眼の中に宿つてゐる」（一四八）とまで思う太郎には、弟が沙金とできれば弟を斬るかもしれない。そうすれば太郎は沙金を失うのみならず、大事に思つてきた弟をも失うことにもなる。それはまた自分自身をも失うことでもあつた。いや、自分の方が斬られるかもしれない。どちらが命を落とすにせよ、次郎と対峙すれば、三人とも失われる。そういう時がそこまで来ているような不安にかられた。

この頃、沙金は太郎に会うことを避けている。たまにあつてもいい顔をしないどころか面と向かつて悪口さえきくようになっていた（一四八）。

猪熊のお婆は沙金と太郎がここ半月も会っていないことを知って

いる。

七月の或る日ざかりに朱雀綾小路の辻で出会つたお婆から今夜の手筈を聞いた太郎は、一人で沙金を思い、次郎を思いつつ猪熊の家に向けて足を運ばせている。

今夜、押し入るのは藤判官の屋敷、集合場所は「羅生門、刻限は亥の上刻」（一三七）、いつものとおりである。押し入る面々は男二十三人、女は沙金とお婆の二人。頭は沙金である。知恵遅れの下女阿濃^{あこぎ}は臨月の身でもあり、「朱雀門」（一三八）に待っていてもらうことにする。

四 沙金をめぐる兄と弟

太郎と別れた猪熊のお婆は、乞食でも棲んでいるような怪しげな小屋の前に腕を組んでたたずむ若侍を見た。次郎である。「何をしてゐるのだえ。次郎さん」と顎をしゃくりながら声をかけた猪熊のお婆の姿を、芥川は戯画をたのしむように描いている。「暮^{ひき}のやうな顔の肉」、「皺だらけの顔」、「つくも髪の毛、暮の面の、厚い唇を舐める舌」（一三九）と容赦ない。「つくも髪」は『伊勢物語』六十三段の「百年に一年たらぬ九十九髪^{つぐも}」によって想像がつこう。ちなみに、先刻、太郎と出会つた時のお婆は、

垢じみた檜皮色の帷子に、黄ばんだ髪の毛を垂らして、尻の切れた藁草履をひきずりながら、長い蛙股の杖をついた、眼の円い、口の大きな、どこか墓の顔を思はせる、卑しげな女である。(二三六)

と描かれている。なにやら西洋漫画にみる魔女の風体である。

古蓆でかこわれた小屋の破れ畳の上に、四十恰好の女が裸同然のなりで、石を枕にして横たわっている。生きていいのか死んでいるのか、身動きひとつしない。疫病に罹って棄てられたものらしく、二三匹の野犬がよい餌とばかりに襲いかかっていたのを通りがかりに見た次郎が、石をぶつけて追いつたところであった。女の腕にはすでに鋭い歯の跡が三つ四つ紫色に刻みこまれていた。腕組みをしてたたずんでいたのは、息のあるうちに棄てられ犬に食い散らされる人間の最期について、次郎なりに感慨にふけていたのだらう。

「死んでしまへば、犬に食はれたつて、痛くはなしさ」

「人間が犬に食はれるのを、黙って見てもゐられないぢやないか」

「その癖、人間が人間を殺すのは、お互に平気で、見てゐるぢやないか」(二四一)

お婆の言う通りだ。しかし、たとえ息がなくなつていても人間が犬

に食われるのをじっと見ていられないのも事実である。

お婆は盗賊仲間の関山の平六へ言伝を頼んだついでに、今夜のために藤判官の屋敷の下見をしておくように言い、屋敷は立本寺の門を左に折れた先にあると教えた。次郎が、そのつもりでこちらへ出てきたと言え、お婆が兄さんの面相では相手に気取られそうで見に行つてはもらえない、お前さんなら大丈夫だよと応じたのは、あの隻眼あばた面の異相では人目に立ちすぎること、自分の墓顔を棚にあげた物言いである。お婆の口にかかれれば兄貴もかなわないと、なにげなく言つた言葉に対するお婆の反応が次郎には意外であった。猪熊の爺はお前さんに話せないようなひどいことを言つてゐるというのである。次郎にはぴんとくるものがあり、「あの事があるからさ」と言え、「あつたつて、お前さんの悪口は、云はないぢやないか」(二四二)、何のことはない、次郎と沙金の仲は猪熊の爺婆に知られていたのである。

爺が聞くに堪えない太郎の悪口を言うのは、太郎が直に爺に突っ掛かるからで、それは太郎の沙金への思いの激しさのあらわれであり、意識の底にながれる「母と子を犯す」非道への怒りがあった。これは先に少しく触れておいたが、年老いた養父にもてあそびものにされる沙金を哀れとおもう情もあったであらう。

太郎の激情は次郎も承知で、お婆に、太郎に気をつけよと言われ

るまでもなく気をつけている。気はつけていても、「兄貴の思惑は兄貴の思惑で」（一四二）、次郎にはどうすることもできない。では沙金と切れればよいではないかと言うのは簡単ながら、そうはいかないのが男と女の仲だ。

太郎は相貌に加えて激情も扱いにくく、それでおのずと目鼻立ちの整った次郎にお婆の気持ちも傾いて、「お気をつけよ」と心配する言葉ももれてくるのだろう。それに兄と弟がいれば、まわりの者の同情が弟に傾くのはありがちなことで、弟妹が兄姉を凌駕する話は説話の世界でも少なくない。

この世にお婆の知らぬことはないかのごとく、今日の未の下刻に、立本寺の門前でお前さんたち二人は会うことになっているではないかと言ひ、続けては、沙金はこの半月太郎と顔を合わせないようになっている、今日の密会が太郎に知れたら「一悶着だらう」（一四二）と注意した。沙金が太郎を避けているのは、すでに気持ちが離れて、次郎に乗り換えてしまったことのあらわれである。

秘密のはずの門前の待ち合わせを、何のことはない、沙金がお婆に話して聞かせていた。それを知っているのです、お婆は藤判官屋敷の下見を持ち出し、わざわざ立本寺の門を左に云々と言ったのだ。実は順序が逆で、待ち合わせ場所の立本寺の名を出すために、あえて下見を口にしたとみるのが当たつていよう。それにしても、自分

の胸ひとつに収めておけばおけるものを、お婆はなぜ次郎に言ったのか。そもそも沙金は次郎との待ち合わせの件を、なぜお婆に打ち明けたのか。実の母と娘だから洩らしても構わないと言えばそれまでながら、聞かされた次郎は驚いたはずである。

お婆が次郎に言いたかったのは一悶着が起きないように注意せよということだったようだ。盗賊の輩は気に食わぬことがあれば「すぐに刃物三昧」（一四二）であるところにもつてきて太郎は一徹人、沙金は並みの器量ではつとまらぬ盗賊の頭領、両者が喧嘩すれば血を見なければおさまるまい。しかし、いくら気性のつよい沙金とは言え打物をふりまわしては男にかなうはずがない。娘が勝つに決まっている喧嘩なら捨て置きしようが、娘に怪我はさせたくないというのは親の情である。長年盗み火付けで世間を渡ってきた暮顔の老婆にもそれくらいの親心はある。かと言って多情を諫めたところで聞き入れる娘ではない。とすれば、太郎がいきりたたないよう次郎に気をつけてもらうしかない。「お前さんによく頼んで置かうと思つてね」というのが、老婆が次郎に物を言いかけた魂胆だったのである。

「大事にならなければいいが」（一四三）と祈る猪熊の婆と別れた次郎は重い心をいだいて立本寺の石段を上り、丸柱のもとに腰を下ろした。沙金と、兄と、色々さまさまが思い起こされてくる。次郎

も苦しんでいるのだ。

次郎と沙金が出来ていることを察している太郎は、次郎を面罵こそしないものの、露骨に不機嫌を表に出す。顔を合わせるごとに次郎からものを言いかけても浮かない返事をして話の腰を折る。沙金との仲を思えば無理もないが、女と会うたびに次郎は兄に済まないと思う。女に会ったのちには「よく兄がいとしくなつて、人知れない涙もこぼしこぼしした」(二四九) こともあり、いつそ兄とも沙金とも別れて東に下つてしまおうと、よそながら暇乞いに行つたこともあつたのである。しかし素つ気なくあしらわれ、沙金に会えば、決心をわすれて情欲の渦にまきこまれてしまう。

二人だけの兄弟で、太郎は兄として精一杯の愛情を注いできた。先に触れておいたように、弟を獄から逃すためには人を斬り殺さえた。兄はおれがお前によせる気持ちは分かつているはずだと思ひ、弟は弟で、わたしが兄の気持ちを理解し、慕っていることは兄も分かつてくれていると思つてゐる。盗賊に身をおしても兄弟の情愛にかわりはない、兄弟の絆は確りと結ばれていると互いに信じてこれまで過ごしてきたのが、ここにきて大きく揺らいでいる。

次郎は自分の不義を憎み、「どの位兄に同情してゐるか、それだけは、察してゐて貰ひたい」(一四九) と思う。挙句には、同じ死ぬなら兄の手にかかつて死ねたら本望だと思ひ込むまでになる。死

と隣合わせの盗賊稼業だから、いつ斬られ、射られて命を落とすかしたのではない。どうせ死ぬのなら兄に斬られて死にたいというのは分からないではないが、斬つた兄の気がそれで晴れるというものでもあるまい。死ぬ者はそれで清算できたとしても、兄は弟を斬つた記憶を引きずつていかなければならないのだ。これは兄には惨いことで、兄に斬られて本望だと言う次郎にはそこらのことが分かつていない。

次郎は、沙金が誰にでも肌を許す多情を憎み、彼女の占有をねがつた。だから次郎は兄にも嫉妬した。男として自然の感情である。それだけに沙金の占有を思わない太郎が奇異に思えた。では弟の自分だけに許さないのはどういうことなのか。次郎には、弟は別なのだという兄の気持ちがわかつていないと言ふしかない。美男の弟への嫉妬ではないのだ。兄弟で一人の女を共有する、そんな穢らしいことができるかという矜持が、盗賊に身をおしても太郎にはあつたのだし、そこにはまた、太郎自身にもしか意識されていないことかもしれないが、可愛がつてきた弟への思いが底流してゐよう。兄弟で一人の女を抱くという奈落に弟を引きずりこんでならない、それだけは弟にさせてはならないというのは兄の大いなる愛と言ふべきである。

『偷盜』は「母と子と犯す」国つ罪の物語に、いま一つ、兄弟で一人の女を共有する物語が重なる。「女を共有する」とは品のない表現ながら、平気で嘘をつき人を殺し、多淫な沙金にむらがる男どもにあるのは肉欲だけだから「愛する」とはさらさら言えず、「共有する」としか言い様がない。「愛」を言うなら、太郎次郎の兄弟愛が『偷盜』のもう一つの主題であった。

五 沙金の計算

立本寺の丸柱のもとを立ち上がって石段に踏み出そうとした次郎の前を、二人の男女が、そこに人がいるとも思わぬ様子で通りすぎた。樺桜の直垂を着て赤鬚をたくわえた男は三十歳くらい、酒気をおびている。市女笠に被衣をかけた連れの女は声と物腰から沙金とされた。唇を嚙んで眼をそらす次郎の耳に、

「ぢやよくつて。きつと忘れちやいやよ」「己がひきうけたからは、大船に乗った気でゐるがいゝ」

「私の方ちや命がけなんですもの」「己の方も、これで命がけさ」（一五〇）

と聞こえてきたのは、女の頼みごとを、酒と色を馳走になった男が大丈夫と請け合っているのだ。

先の辻で足をとめた二人は、暫くその場で人目も気にせずふざけ

あつていたが、やがて、門前に戻ってきた沙金の「今のやつを見た？」（一五一）と次郎にたずねる顔は笑っていた。女は次郎が見ていることを承知で、この振舞にでたのである。

男は今夜押し入る藤判官の所の侍で、屋敷の中の様子をみな聞き出してきたのである。沙金の色香に酔わされた男は屋敷の様子を洗いざらい喋って、最近買った陸奥の三才駒の話まできかせてくれたそうで、沙金はその駒は太郎に頼んで盗ませようと言った。

女が男に頼み事をするときには、普通は、あなたを頼りにしている、あなたに思いを寄せておりますという意味合いを含ませており、だから男は女に頼み事をされると、女はおれを頼りにしている、おれを思ってくれていると鼻をひくつかせる。沙金に馬を盗んでおくれと頼まれれば、沙金はおれを見限っていないと太郎の機嫌が直る。それは次郎にとつてうれしいことだったが、沙金の意図を聞かされて次郎は息をのんだ。

話は、太郎に馬を盗ませる話に続けて、初めはともかくも今は太郎は何でもないと言ったことから始まった。それは、今はもうあなただけと告白しているのにひとしく、うれしいのはうれしいけれども次は自分がそうなるかもしれないわけで、沙金の多淫を思えば多分にそのおそれはある。そのうちおれもそうなるのかと言えば、どうだかわかりやしないと癪高い声で笑う。お前は女夜叉だと言え

ば、こんな女夜叉に惚れたのがあなたの因果と応えて「そんなに疑ふのなら、いゝ事を教へて上げませうか」(一五二)と、先の侍に今夜の侵入をすっかり話したと言ったのである。今夜泥棒に入ろうとする家の者に、今晚泥棒に入りますと話を聞かせるのは捕まえてくださいと言うにひとしく、そんな馬鹿がどこにいるか。五六人の男が藤判官屋敷へ盗みに入る相談をしているのを聞いた、それが今夜のことと虚実とりまぜて教えたうえに、相当の用心をなさいませと忠告までしたというのである。さっきの侍は今夜の助っ人を集めに行ったもので、二、三十人の侍が集まるらしい。

「あなたの為にしたの」(一五二)と言われても飲み込めなかった次郎は、侍が待ちぶせするところで太郎に馬を盗ませると聞いて、狙いは太郎の殺害だと察した。

「兄貴を殺す!」「殺しちや悪い?」(一五二)

「悪いよりも——兄貴を罠にかけて——」「じやあなた殺せて?」(一五三)

見つめる野良猫のように鋭い眼が次郎の意志を麻痺させていく。

「しかし、それは卑怯だ」「卑怯でも、仕方がなくはない?」

眼だけではない、静かに次郎の右の手をとる沙金の両手が、また、男を蕩けさせていく。兄貴一人ならいいが仲間まで危ない目に合わせてまで、と言った時には完全に沙金の術中にはまっていた。し

まったと気づいた時は遅く、

「二人やるのならいゝの? なぜ?」

「太郎さんを殺していゝんなら、仲間なんぞ何人殺したつて、いゝでせう」(一五三)

と、すかさず追い打ちをかけられて、辛うじて、お婆はどうすると問い返せば、死んだら、死んだ時の事と切り返された。あなたのためには親も棄てていると言われれば、もはや返す言葉はなくなっている。冷たい両手に、かたく沙金の手をとらえたのは兄よりは女をとる覚悟を決め、女につたえたことになる。

六 みんな畜生

妻は夫が連れ子の娘とつるんでいることを知っている。夫も妻に知られていることを承知している。娘も養父との仲を母に知られていることを承知している。普通の感覚ならば、夫は妻に、娘は母に気づかれないように努めるものを、ばれてしまったものは仕方がないというのか、三人が三人ともあけすけである。断るまでもなくその三人は猪熊の爺婆と沙金である。その沙金と太郎、次郎の関係も、前者ほどあけすけでないというだけで、これと同質である。問題はそれだけではなく、沙金と兄弟の関係を爺婆も承知しているのであつて、性は秘すべきものという規範が混沌としている。

芥川龍之介は『偷盜』を失敗作として顧みなかったが、古代より禁忌視されてきた骨肉の性関係を取り上げていて、それなりに評価されてよいと思われる。物語の背景、道具立ては戯画風におどろおどろしいけれども、人間、男おんなというものの得体の知れなさは伝わってくる。しかも活劇を見るような面白さの中に葛藤が描き込められていて、川端康成『千羽鶴』、丹羽文雄『菩提樹』、吉村昭『孤独な噴水』などとはまた違った風味の「国つ罪」、非道の物語を読む喜びをおぼえる。

沙金と次郎が手を重ねていたころ、太郎は猪熊の家に向けて歩いている。そして、一歩足をふみいれた時、左手に髪の毛をつかみ、右手で口をこじあけて瓶子の液体をそそぎ込もうとする禿げ頭の爺と、悲鳴をあげて抵抗する下女の阿濃を見た。部屋におどりこむやいなや奪い取った瓶子を投げ捨て、倒れかかった遣戸の上に爺を蹴り倒した。下女は手を合わせて太郎を拝み、頭をさげるとそのまま裸足で逃げ出し、逃がすまいと追いつがる爺はふたたび灰の中に蹴り倒した。「助けてくれ。人殺しぢや」（一五四）とわめきながら綱代屏風をふみ倒して厨の方に逃げようとする爺の襟首をつかまえ、その場に引き倒した。

「やい、誰か助けてくれ。人殺しぢや。親殺しぢや」（一五五）と

わめく爺が語るところによると、瓶子のなかの液体は墮胎薬で、婆がこしらえたものだという。知恵遅れとは言え阿濃も女である、母になる本능が抵抗をさせたのだろうが、なぜ爺婆が下女を墮胎させようとしたのかはわからない。

爺と阿濃の騒動の場面に太郎が顔を出すという演出の小道具に、ふかい考えもなく墮胎薬を持ち出したのだろうか、これは芥川が先の松岡への手紙に「臨月の女に墮胎薬をのませようとする所なんぞある人は莫迦げてゐると云ふだらう」と書いているとおりの大失敗であった。その夜中、阿濃は盗賊が稼ぎから戻ってきたときには子を羅生門の楼上で子を産み落としている。

阿濃に関していま一つおかしいのは、皆が稼ぎに出払ったあと、阿濃ひとりとは朱雀門に待たせておくと言っておきながら帰りを待っていたのは羅生門だったことである。第一、悪事をはたらいて引き上げる盗賊どもが都城の真ん中の朱雀門を集合場所にするわけはななく、やはりここは都大路の南の端の羅生門でなければならぬ。先にも少しく触れておいたように、猪熊の婆についても、その老醜ぶりをおもしろおかしく描きすぎて齟齬をきたしているところがあったように、執筆中はその場面その場面にのみ気持ちが集中するという視野狭窄に陥っている点がみとめられるけれども、それらの瑕疵は瑕疵として、一篇の物語としては面白いと評価してよいと思われる。

る。

爺のさけぶ「親殺し」は面白い。二人の遣り取りを引いてみよう。

「誰がおぬしを殺すと云つた?」「人殺し。親殺し。嘘つき。親殺し。親殺し」(一五五)

「おぬしを殺すやうな太刀は、持たぬわ」「殺せば、親殺しぢやて」

「おぬしを殺して、何で親殺しなる?」「何故と云へばな。沙金は、わしの義理の子ぢや。されば、つながるおぬしも、子ではないか」(二五六)

戯画風の遣り取りながら、捻り出した爺の言い分にも一理ある。しかし爺の子にされた太郎も、では義理の娘を「妻めにしてゐるおぬしは、何だ。畜生かな、それとも亦、人間かな」と負けていない。「畜生かな、それとも亦、人間かな」とは揶揄する物言い、お前は畜生である、人間ではないと決めつけているのだ。人殺しも辞さぬ盗賊に身をやつしても、妻の連れ子に手を出す男を畜生と断じているのは、まだ太郎が人間の域にとどまっていることの証であろうか。爺も己を畜生と自認したものか「畜生でも、親殺しはすまいて」(二五六)と減らず口をたたいて、わしが沙金の子と思わねば

ならないなら、沙金に連れ添うお主もわしを親と思わねばなるまいと言いつのる。「沙金を妻にするわしが、畜生なら、親を殺さうとするおぬしも、畜生ではないか」と勝ち誇った顔色で、さらに人差し指を突きつけて「どうぢや。わしが無理か、おぬしが無理か、いかなお主にも、この位な事はわかるであらう」と饒舌はやまず、果てには左兵衛府の下人だった昔の話までもちだしたのであった。畜生が畜生を殺す、これは面白かるう、さあ殺せと、そこまで云われれば立場は逆転している。攻勢に転じた爺は、堕胎薬に立腹したのを見れば、あの阿呆を孕ませたのもお主らしい、そのお主が畜生でなくて、何が畜生か、畜生はお主の方だと毒づきながら、倒れた遣戸の向うへ飛び退いて、いつでも逃げだせるかまえてある。

興味を覚えるのは、畜生と罵りあいながら、互いにおれの女に手を出したと相手を罵っていないのである。爺と太郎が諍うとすれば、まずそのことが問題になるはずなのに、そこへ悪口が及んでいないのだ。すでにそれは喧嘩の種にもならぬほど、両者の間では、けりがついているということなのか。

お前のような畜生はこれでも食らえとばかりに痰を吐きかけると、爺は、

「畜生呼ばゝりは、措はかいてくれ。沙金は、おぬしばかりの妻めだよ。次郎殿の妻でもないか。されば、弟の妻を偷ぬすむおぬしもや

はり、畜生ぢや」（二五八）

いま、太郎がもつとも苦しんでいることをずばりと投げつけてきた。止めを刺されたと言つてもよいほどの痛打であつた。さすがに爺は伊達に年はとつていない。

沙金に会うために来たものの会えず、爺の罵詈に耳をふさぐ思いで猪熊の家を出た太郎は羅生門に向つた。沙金は強盗に出る時にきまつて装着する男装束や打物を羅生門の楼上に隠しているので、そこに会う望みをかけたのである。しかし集合時刻の亥の上刻・午後十時半にはまだ間があり、沙金が来ている可能性はほとんど零にかしい。それでもそちらに足を向けたのは、そこ以外に女のいそうな目当がないからで、沙金がすでに遠い存在になっているのが太郎にも痛感されたであろう。

四条大路へ出たとき、立本寺の築地の下を話しながら通る二人の男女を見た。笑を残して小路に消えていった男の腰に、きらりと日に光る黒鞘の太刀を見た太郎は歩みをとめて「どうせみんな畜生だ」（二五九）と呟いた。沙金に、弟に絶望した瞬間であつた。絶望しながら、あの二人がこれから獣のように過ぐす数刻が想われたかもしれない。描く図柄は最近まで自分が沙金としてきたことだから生々しいはずである。

七 兄弟の絆

亥の上刻が迫つてきたころ、仲間が三々五々羅生門の前に渡した石橋に集まつてきた。鉾をもつ猪熊の爺がいる。次郎、お婆、阿濃の姿も見える。黒い水干、太刀を佩ぎ、矢を背に負い、弓杖をついた沙金は皆に、裏から十五六人が太郎とともに、残りは沙金と表から侵入するよう下知して、「中でも目ぼしいのは、裏の廐にゐる陸奥出の馬だがね。これは、太郎さん、あなたに頼んで置くわ。よくつて」（二六〇）と言つた。皆のまえで狙いは陸奥馬、それを太郎にと名指しで頼めば太郎も後に引けまい。それに、馬を奪つてくれれば沙金の気持ちを取り戻せるかもしれないという期待もあつて、かならず廐を襲撃する。そして、待ちぶせする屋敷の侍に斬られよ。

屋敷の侍に、今夜盗賊が襲うと話した時、賊は裏手から侵入すると話していたと言わなかつたであろうか。嘘をつくなら、裏からと言う方がより本当らしく聞こえようし、表から入る自分たちはそれだけ安全である。

表から襲つた一群は、いきなり先頭の真木島の十郎が太股を深々と射られて倒れたのははじめとして、瞬く間に二三の者が顔や臂に矢傷をうけ、沙金も水干の袖を射抜かれた。十郎を救おうと走り寄

る盗賊の機先を制して、鋭い牙の狩犬六七頭がすさまじい唸り声をあげて襲いかかってきた。藤判官邸の邀撃態勢はぬかりなく、獐猛な狩犬を盾にしてそのうしろから十人十五人の侍が太刀をもって襲いかかってくる。

十郎の倒れているあたりで敵味方入り乱れての乱闘がつづくなかに、裏手にまわった仲間の一人が血にそまり、刃こぼれた刀を肩にかついでかけつけて「あつちは皆ひき上げますぜ」(一六三)と言うと、沙金の前に来て「何しろ肝腎の太郎さんが、門の中で、奴等に囲まれてしまつたと云ふ騒ぎでしてな」と報告した。沙金と、沙金に付き添うていた次郎は眼を見合わせた。太郎が討たれれば、沙金にとって今夜の襲撃の目的は半ば達したようなもので、「囲まれて、どうしたえ」と尋ねたのは、死んでくれていたらいという言葉が喉のそこまで出てきている。「どうしたか、わかりませんが、事によると、——まあそれもあの人の事だから、万々大丈夫だらうとは思いますがな」、次郎が顔をそむけながら沙金の側を離れたのは、この女のゆえに兄を殺したという思いが頭をかすめたのではなかったか。

裏手の一味も手厳しい待ちぶせをうけた。勢い込んで侵入した先手の者共は斬り立てられて、入ってきたばかりの裏門へ算を乱して敗走する。真っ先に逃げだした憶病者の猪熊の爺は動転したのか屋

敷の侍たちの中へ入りこんだ。禿げ頭ながら酒太りした体躯とひっ提げた鉾のもののしさに豪の者と見られたのが爺の災難で、抜刀の侍が二人三人と前後からつめよってくる。苦し紛れに「逸るまいぞ。わしはこの殿の家人ぢや」(一六九)と叫んでも「嘘をつけ」と罵り返され、所詮逃げられないと覚悟をきめると肚も据わったか盗賊本来の凶悪な相貌をみせ、歯をむき出しにして「嘘をついたがどうしたのぢや。阿呆。外道。畜生。さあ来い」(一六九)と鉾を構えた。侍の中から屈強な赤痣の者が出てきて、有無を言わず斬りかかってくる。数合のうちに振り上げる鉾はふらつき、後退するところを鉾の柄を半ばから斬り折られ、次の太刀で右の肩先から胸にかけて袈裟がけに斬られて尻もちをついた。尻は地べたに着けたまま後退りしながら、多分片方の腕は赤痣の侍にむけてつきだして、欺^{だまし}討ちじゃ、助けてくれと仲間^{さす}に助けをもとめるところを、赤痣の侍は爺の血を吸った刀を振りかざした。振り下ろせば彼の命はそれまでである。その時、飛び出してきた猿様のものが二人の中に押し割って入ると、小刀^{さす}を侍の乳の下へ刺し通した。同時に侍の横薙ぎの太刀をくらってはねあがりざまに侍の顔にしがみついた。二人は倒れても猛烈に攫み合って「打つ。噛む。髪をむしる」(一七〇)格闘のあげく、猿様のものが上になって組み敷いた赤痣の侍を刺し殺した。猿は猪熊のお婆で、彼女も「お爺さん。お爺さん」

と二三度よびかけたが答える者のないままその場で死んだ。「高が青侍の四人や五人、私だつて、昔とつた杵柄さ」（一三七）と言つた言葉に嘘はなかった。

猪熊の爺はお婆に危うい命を助けられると、わが命を助けた妻を放置して、わが身ひとつ、いち早く逃げ出して、老妻の最期の呼びかけは聞いていない。彼も羅生門にはたどりついたのちに死ぬ。亡骸は仲間によつて藪の中に埋められた。

処で、赤痣の侍と爺が斬り合いを始めた時には、前後からつめよる「二人三人」（一六九）の侍がいたはずだが、赤痣とお婆がもみあつてゐる時、あるいは赤痣が組み敷かれた時に、彼等は赤痣に加勢しなかつたのか。二人の格闘中に深手の爺が逃げ出すのに気づかなかつたのか。赤痣と爺、赤痣と婆の闘いの場には他に人がいなかったかのようである。

太郎は計画の失敗を知ると陸奥の馬だけに狙いをさだめて、単身門中に踏み込み、廐を蹴破つて背に飛び乗ると一散に羅生門へ駆けた。「太刀と鉾との林の中から、一人に遇へば一人を斬り、二人に遇へば二人を斬り」（一七二）、口に血刀をくわえて嵐のように駆けた。口角には微笑が漂っている。沙金がのぞんだ馬である、ふたたび沙金の心がこちらに傾くかと思えば、晴れ晴れとして笑みももれてこよう。おれはやりとげた、おれだからできた、次郎よ、お前に

出来るか、お前にできるわけがないと思つた時、侍に斬り伏せられる次郎の姿がうかんだ。それは不快な想像ではなく、そうなることを祈りたいほどであつた。

次郎が人手にかかつて死ねば己の手は汚さずに済む。次郎を殺したと沙金から憎まれることもなく万事好都合である。命がけで疾駆する馬上でそう思つたほど、沙金をとられた恨みと彼女への愛情は深かつたが、一方で弟の命を人にまかせて女をとりもどそうとする己の卑怯を恥じた。恥じるだけまだ人間の欠片があつたと言ふべきか。

刀の血をぬぐつて鞘におさめて辻をまがつた時、二十、三十の野犬の吠え立てるなかに太刀をかざす一人の男を見た。次郎であつた。

裏手の者に襲撃失敗を告げられた沙金が引上げの口笛を次郎に吹かせたその時、侍と犬が一体になつて二人に襲いかかつて来た。沙金の放つた矢は白犬一頭の腹を射抜いて仆し、次郎は斬りつけてきた男の太刀を受け止めたときに樺桜の直垂と赤鬚をみとめた。立本寺の前を沙金と通りすぎて行つた男、沙金がこの男を見ておおきと言わんばかりに目の前を連れ立って行つた男であつた。「沙金はあの男と腹を合せて、兄のみならず、自分をも殺さうとするのではあ

るまいか」(二六四)という疑念が突如として頭をかけめぐる。兄に盗ませる陸奥駒の話聞かせたのもこの男で、あまりにも出来すぎた話ではないか。兄殺しをたくらむ女なら、弟殺しを謀るなどたやすいことだ。事前に教えて屈強の侍どもに警備を固めさせて、われら兄弟を殺し、押し入った仲間も皆殺しにさせて、われ一人藤判官屋敷の侍に乗り換えようとしているのではないか、そう疑って不思議はない。猛然と怒りを発した次郎は赤鬚の胸を突き刺し、倒れた彼の顔を藁沓で踏み躪った。血のしたたる刀を胸から引き抜くところを幾人もの侍が四方からとりかこんで攻め立てる。背後から鉾をかまえて仕掛けてくる男は、後頭部を射抜かれて倒れた。誰が放った矢なのかわからない。「獣のやうな唸り声を出して、相手を選まず渡り合」(二六四)うなかで、瞬間、沙金のことが閃めく。憎いとも無事かとも思う間もなく次の瞬間には敵の太刀が斬りつけてくる。斬り立てられは斬り返し、さらに斬り立てられていつしか一人小路に逃れ出て、相手は二人の侍と三匹の犬になっていた。

一人を殺し一人を追ひ払った。獐猛で憤より巨大な犬に吠ええられた。巨大なくせに敏捷で、牙は鋭く、ある意味では犬が侍よりも手ごわく厄介だ。それでも足を狙った犬の背を危うく飛び越えて背後に着地すると一目散に走った。斬り合いに疲労した体ではすぐさま背中に牙を立てられそうなものを、とにかく逃げた。そして、

逃げて行く小路の先を二、三十の野犬がふさいでいた。小屋に捨てられた疫病女を喰いあさっていたのである。追いかけてくる犬と死体をむさぼる野犬に、次郎の逃げ場はなかった。野犬は次郎をあらたな餌食とみて襲いかかってくる。

羅生門に走らせる陸奥駒の馬上から太郎が見たのは、進退極まつたこの次郎であった。太刀を振りかぶっているものの、背後の崩れかかった築地が逃げ場のなさを象徴している。

盗賊が押し入ってからの叙述は鉦太鼓の鳴り物いりの活劇をみるようで、『今昔物語集』では「悪行」ものが面白いという芥川龍之介は自家の『今昔物語集』よりいっそう面白く物語を仕立てている。作者自身が、筆がおどっていると自賛しながら書いていたところかもしれない。

馬は、高く嘶きながら、長い鬣をさつと振ふと、四つの蹄に砂煙をまき上げて、瞬く暇に太郎をそこへ疾風のやうに持つて行った。(二七一)

「次郎か」と叫びながら、野犬の群れの中に創ついた身のまま立ちつくす次郎を置き去りにして「走れ、走れ」(二七二)とささやきかけるものがある。次郎とはこのままでは済まない、いつかきつと殺らねばならぬときがくる、いま走ればおれのかわりを犬がしてくれる、それだけのことだ。おれが野犬に取り囲まれているのを見れ

ば、次郎だって犬にまかせるに違いない。羅生門は遠くはないと、太郎は「半無意識に、馬の腹を蹴った」（一七二）。

小路を羅生門へ疾駆する馬上で、野犬の群れに牙を立てられ、肉を引き裂かれる次郎の姿を太郎は想ったか。

兄弟については分かっているのは右獄の放免と筑後の前司の小舎人だったことと、七八年前に、ということとは十歳から十三歳のころに兄弟して疱瘡にかかったということくらいである。親は何者で、どういう育ちをしてきたのか。疾くに親を失って、兄弟二人、肩を寄せ合うようにして生きてきたものか。沙金とかかわりあうまでは仲のいい兄弟であつたことは間違いない。自身が右獄の放免でありながら左獄へ入れられた弟を盗賊を語らつて逃がしたこと一つをとつても、弟思いの兄であつたことは知れる。幼かつた頃、五条の橋の下で鮎釣りに興じたなつかしい思い出がある（一四六）。よく兄を慕つてくれた弟であつた（一四三）。双子がそうであるように、互いに相手の痛みを感じられる兄弟ではなかつたのか。

馬を走らせながら、

臂を衝いて、なつかしい語が、溢れて来た。「弟」である。肉親の、忘れる事の出来ない「弟」である。太郎は、緊く手綱を握つた儘、血相を変へて歯噛みをした。この語の前には、一切の分別が眼底を払つて、消えてしまふ。（一七二）

「弟」がなつかしい語であるのは、次郎を「次郎」の名前よりは「弟」と意識して過ぎてきた濃密な月日があるからだ。「弟」の一語には一緒に遊んだ思い出が凝縮されており、「弟」と口に出してつぶやけば、庇うように手を伸べてきた自分と、頼りきつて無心に慕つてくる弟の姿が沸々とうかびあがつてくる。この時、野犬の群に牙を立てられる次郎の痛みは太郎のものになっていた。余人の影はない。

取つて返して「次郎」と叫ぶ太郎の隻眼に、次郎は「今まで知らなかつた、不思議な愛が燃え立つてゐる」（一七三）のを見た。仲が良いという域を超えた、魂と魂が擦れあい響きあうような兄弟の愛が相互に自覚された。小路を輪乗りしながら「早く乗れ。次郎」と叱咤する声に、次郎は太刀を遠くへ投げて野犬の注意をそらした隙に馬の首におどりつき、太郎は猿臂をのぼして襟上をつかんで引き上げた。馬が向きを変えたとき、馬の背で次郎は兄の胸に抱きついて、唸り声をあげて飛びかかつてきた黒犬が次郎の脛巾（はばき）を食いちぎつて群れの中に落ちていくのを「うつくしい夢のやうに、うつとりした眼でながめてゐた」。いまは天も地も見えない、ただ、次郎を抱き、じつと行く手を見つめている兄の、半面に月光をあびた顔が見えるだけである。太郎は天地をすら超えた何ものかに変じて、やさしく、厳かだった。そして「母の膝を離れてから、何年にも感

じた事のない、静な、しかも力強い安息」(一七三)が徐に心に満ちてくるのを次郎は感じていた。馬上であることも忘れて、「兄さん」、しかと太郎を抱いて微笑する次郎の顔に涙が流れた。

翌日猪熊の或る家で女の惨殺死体が発見された。女は沙金。女を難詰しているうちに、いきなり次郎が抜刀して斬った。助けをもとめて逃げるところを太郎が斬った。絶命前の女に二人して罵声をあびせかけていたのは、兄弟に殺し合いをさせようとした事をなじったのか。絶命すると二人は「急に抱きあつて、長い間黙つて、泣いてゐた」(一七九)。感慨は様々であろう。肌を合わせ、肉欲に狂ったときもある女の血まみれの死体をみる思いは如何なるものであったか、手を下したのはほかならぬ肉を貪った当の兄と弟である。悔悟の念、兄弟仲違いの元凶報復の思いはあったか。或いは兄弟の絆の確認。

沙金殺害の場に居合わせた阿濃が検非違使庁の役人に語ったところによると、二人の男の名は太郎と次郎と言い、一頭の馬に二人してとび乗るとどこかへ行ってしまったという。腕のいい盗賊である、馬の一頭くらい何とでも調達できようものを、一頭に二人で乗馬とは彼らの一心同体を表すものであろう。

もつとも、この語り口について海老井英次氏に「最後には兄弟愛に目ざめるというストーリーの展開はいかにもセンチメンタリズムに

まみれており、通俗的である」という評があり、正面から論評すればその通りである。冒頭に述べたように『偷盗』を活劇、劇画とみれば、センチメンタリズム、通俗的であるのがむしろ当然だと言える。

「国つ罪」の禁忌を犯した猪熊の命婆と娘沙金を、芥川龍之介は畜生扱いしただけではなく、生かしておかなかった。芥川が「国つ罪」をどれほど認識して、三人を死なせたかはしらない。認識の有無にかかわらず、日本人の心に底流する民俗心意が、小説が芝居がっているという嫌いはあるにせよ、自然に、結末を三人それぞれ死へもつていったと言えよう。

一方、母の夫と通じて恥じぬ女の色香にまどわされ、命の取り合いかねなかつた兄弟にはあたたかい眼をそいで、世間に復帰させた。丹後の守某に隨身として仕えた太郎なる者があり、勇猛の名を馳せた。弟もともに仕えたと、この小説を結んでいる。ここに芥川龍之介の心意はうかがえよう。

『偷盗』を劇画風でありすぎる、通俗的だ、あるいは瑕疵があるからといって、失敗作として葬り去るにはおよばない。純文学だとかまえるから失敗作だと顔を俯けなければならなかったのであつて、活劇だと言つて開き直つておけば、それなりに興味があり、これはこ

れで面白い作品として評価してよいと思われる。

注

- （1）『芥川龍之介全集』第七卷一三二頁。筑摩書房 昭和四十六年九月。
 - （2）三苦浩輔「いろと色好みと国つ罪の物語」。愛知学院大学文学部紀要第三十五・六号 平成十八年・十九年三月など。
 - （3）吉田精一『芥川龍之介全集』第一卷『偷盜』解説四〇七頁。昭和四十六年三月。
 - （4）『芥川龍之介全集』第五卷「今昔物語に就いて」一二五頁。昭和四十六年七月。
 - （5）海老井英次氏『芥川龍之介——人と文学』五六頁。勉誠出版 平成十五年八月。
- 引用した『偷盜』は右の『芥川龍之介全集』（筑摩書房）による。
数字は頁数。

